# 5Sが人間の基本

**会社の上司や学校教師など、指導者はその言行によって若い人に模範を示し育てる立場にある。下が信頼尊敬すれば「この人の言うことなら」と従い、まねる。指導者は知識と技能だけでなく総合的な人間のデキがよいこと、すなわち十分な人間性（知識教養人格）を備えていることが求められる。**

経営管理講座 299

染谷和巳

## 人間性欠如人間は騒ぎ立てる

元校長辻井勝氏の手紙は続く。

「福井の中学校がマスコミにとりあげられるのは稀だからであり、他より優れているからであります。大多数の学校は子供に対して人間性の教育をしておりません。それは教師自身に指導者としての人間性が備わっていないからだと言えましょう。頭でっかちでプライドが高く上の言うことを素直に聞きません。新米教師まで自分は完全に一人前と思っています。大学院出の教師は特にその傾向が強く見られます。

採用に問題があります。採用担当者（私もその一人でした）がペーパーテストの点数や表面的な態度、受け答えで採用してしまいます。指導者としての人間性を見ていません。

沖縄の基地のフェンスに反対のビラを張り、デモ活動をするのは元教師が多いと聞きます。国の年金をもらっていながら反国家の活動をするのは人間性に大きい欠陥があるとしか思えません。

日本の子供の学力は世界ではレベルが上位にありますが、人間性といった面では疑問符がつきます。

ご指摘のとおり、教師の質の向上は学校や文科省だけでなく政府の課題だと思います」

頭でっかちでプライドばかり高くそのうえ労働者意識が強い教師は子供の人間性を育むことができない。少年期青年期の人間性形成期に親と学校教師がそれをしなければ、子供は子供のまま、体ばかり大きいが心は稚拙なままである。

人間性を備えた大人とは、騒ぎ立てない人である。地震や台風で被害にあっても、自分の不幸を訴えず、支援せよ補償せよと要求しない人である。

人間性欠如人間が増えたので、ついにはホームに落ちる人をなくすため山手線のホームに壁が設けられた。落ちない注意と落とされない用心をするのが大人であるが、「また落ちた、危ない、もっと安全に」と騒ぎ立てる幼児的な声が勝ってできたのである。

日本の学校教師には優秀な人が少なくない。二・六・二の原則どおり二割は優秀である。問題は普通の六割が劣等の二割のほうに近いことである。この六割のでもしか教師、労働者教師の人間性を高めなければならない。

辻井氏は「教師が成長するかしないかはどの学校に配属されるかで決まります」と言っているが、これでよくなる教師は一割もいないだろう。人間性向上の具体的教育方法が必要である。それは学問の領域ではなく身近な生活の領域にある。

## 入野さん凸斗君ちはごみ屋敷

一万人に一人の天才と百人に一人のばかは人間性を求められない。「あの人は天才だから」「あいつはばかだから」と人間性に大きい欠陥があっても許される。教育の範疇の外にいるからである。

人間性とは別の言葉で言えば社会性である（全く同じではないが）。大人が社会生活を送るうえで、お互いがお互いに持っていることを求める性質である。社会性に欠ける人は他人に迷惑をかける。人を不愉快にする。人の手を煩わせ、人に余計な負担をかける。

家庭で親が子供にはじめに教えるのは言葉。そのつぎが整理整頓。「片付けなさい」「使った物はもとに戻しなさい」である。

おもちゃを散らかしっ放しにしている子供を叱らない親はいない。きちんと片付けたなら我が子をほめない親はいない。

人間性教育の端緒は整理整頓清掃清潔しつけの5Sである。大人になって5Sができない人は会社ではもちろん、学校でも家庭でも健全な生活が送れない。だから親は子供を厳しくしつける。天才とばかは免除されるが、ふつうの人は5Sができないと仲間外れにされる。それだけでなく上司や教師など指導的立場には立てないし、仕事もできない。

ある主婦。夫がダンボールの空箱を捨てようとすると「捨てないで！　こういうしっかりしたのはなかなか出ないからとっとくの」と言う。

部屋に物が増えて足の踏み場もないので夫が片付けると「さわらないで」「それいるのよ」「とっとくの」。夫婦喧嘩の種である。

主婦の寝室はベッドの回りも物で一杯、居間も散らかし放題。初めは何もなかった客間も物が積まれ物置き化しつつある。

押入れやたんすなど収納部は十分あるが、みな満杯で外に物があふれている。さらに通信販売で物を買うので玄関まで雑多な物が置かれている。

夫は「入野さん凸斗君ちはごみ屋敷」と川柳でからかうが主婦はこの川柳がピンとこないようで態度行動を改めない。相変らず「それいるのよ」「とっとくの」と夫を責めている。夫は自分がいなくなれば本当にごみ屋敷になってしまうと心配している。

整理整頓とは「捨てる、戻す、分ける」である。

いらない物は捨てる。いつか使うかもしれないがいつ使うかわからない物は捨てる。使った物は所定の場所に戻す。使い終ったらその手で戻す。中華料理店の料理人は料理を作るとその手で鍋を洗って戻す。これが習慣になっている。例の主婦は包丁もしゃもじも鍋も流し台に積みあげて戻さない。分けるは同種の物を分類すること。場所を決めて一応分けて置く。だがいらない物、使わない物が混ざっていく。また戻す時に違う場所に入れてしまう。こうして〝分類〟は名ばかりになる。

捨てる、戻す、分けるができない人は人間性が劣る。物の整理整頓は頭の中の整理整頓と連動している。

「何を言っているのか解らない」と言われる人は頭の中がごちゃごちゃである。身の回りが整然としていないから頭の中も整然としない。頭の中の捨てる、戻す、分けるがうまくできないのである。外から吸収する知識を整理整頓できないので「何を言っているか解らない」「何が書いてあるか解らない」となる。もちろんキラッと光るアイディアなど出ない。つまり仕事ができない。人を指導できない。

天才とばかは除外と言ったが、物心つかない赤ん坊と体が動かない老人も除外される。こうした人は社会の被保護者である。これ以外の人は人間性の土台として整理整頓できることが求められる。

## 整理整頓すれば意識が高まる

意識（物の見方考え方）は知識と経験で決まる。自分にとって何が大事か大事でないか、会社にとって何が大事か大事でないか、国にとって何が大事か大事でないかの判断がその人の意識を作っていく。

ということは、いくら知識を得ても、いくら経験を積んでも、頭の中でその軽重大小の整理整頓ができなければ高い意識の持ち主にはなれない。

国や会社に大事なことは自分にとっても大事なことである。自分は国民であり社員だからである。たとえば会社は存続、信用、利益などを大事にする。これを軽視し、逆らい、潰そうとする社員は意識が低い。労働者意識は会社が大事にするこうした価値を尊重しないから会社にとって低い意識になる。

学校は子供の健全な成長を大事にするが、教師小原礼子は教室でそれに反する言動をした。子供の成長に悪い影響を与えた。よって教師失格の低い意識の持ち主である。

昭和十一年（一九三六）の二・二六事件。青年将校十余名が貧しい国民を救うために「昭和維新」を旗印に首相大臣などの要人を襲撃して新政府樹立を要求した。

このテロが失敗したのは天皇の意思と国の法と秩序を軽視したためである。天皇のためと言いながら天皇の意思に背いた。そのため逆賊として罰せられた。明治維新が成功したのは薩長軍が天皇を上にいただいて官軍として幕府軍と戦ったからである。青年将校の言動は会社を潰す過激な労働運動を煽動する労働者意識の発露に似ている。

意識は幅広い知識と経験を、捨てる、戻す、分けるの整理整頓によって高めていく。頭の中での整理整頓ができないと、片寄った思想の狂信者になったり、民意に流される付和雷同者になったりする。

もらうお金と働き（エネルギー量）をはかりにかけて、より少なく働きより多くのお金を得ようとする意識の人は会社でも学校でも有害無益であり、経営者はこうした人を断固排除しなければならない。

もし排除できないならこの人の意識を変えなければならない。話しても読ませても意識は変わらない。まず意識の土台の整理整頓ができるよう教育しなければならない。

では整理整頓できない人をできるようにするために指導者はどうすればいいか。